# 子どもを亡くした母親のモーニング・ワークのプロセス
## —先天性障害児をもつ母親の事例—

前盛ひとみ*　　岡本祐子*

# The process of mothers' mourning work following the death of a child

Hitomi MAEMORI,　Yuko OKAMOTO

The purpose of this study is to describe the psychological feature of the process of mothers' mourning work following the death of a child and to describe the process of the change of the relationships between them and other family member caused by a child's ill and death. It was made semi-structed interviews with 4mothers who have lost their children. The main results were as follows. The process of their mourning work consisted of five phases; shock, denial, emotional confusion/sorrow, struggle, reconstruction. The process of the change of the relationship between mothers and fathers consisted of seven phases; conflict between them, cooperation with fathers, distrust of fathers, understanding fathers, feeling the sorrow of fathers, trust in fathers, grope of a relationship between them. The process of the change of the relationship between mothers and other children consisted of two phases;conflict by separation, a mental support.

Key word:　death of a child, grief, mourning work, family

## 問題と目的

家族との死別は，人が人生において直面する最も精神的打撃の大きい出来事の一つである。中でも，子どもとの死別は特に悲嘆が強く，その対応が難しいとされる（瀬藤・丸山，2004）。このような子どもの死を含め，愛情・依存の対象の喪失を受け入れていくためには，モーニング・ワーク（mourning work）を行うことが課題となる。モーニング・ワークとは，愛情・依存の対象を失う体験に伴って生じる思慕・怨み・憎しみ・つぐないなどの悲嘆を体験し，解決していくという自然な心の営みのことである（小此木，1979）。対象喪失に伴うモーニング・ワークに関する研究は，Freud, S.（1917）に端を発し，主に精神分析領域において発展してきた。それ以後もモーニング・ワークの研究は数多く行われてきており，現在では，Bowlby, J.（1980）や Kübler-Ross, E（1969）などに代表されるような，モーニング・ワークのプロセスが一般的な順序を持ついくつかの段階を経るとする，段階モデルが一般的となっている。

親子の愛着の絆は，他の人間関係と比べても特別な意味を持っており，親が子どもを喪失するこ

* 広島大学大学院教育学研究科（Graduate School of Education, Hiroshima University）

とは，単に愛する対象がいなくなるというだけでなく，親役割や親としてのアイデンティティを失う，家族システムが大きく崩れるなど他の重大な喪失を伴うと言われている（Rando，1986）。そのため，親にとっての子どもの死は，他者との死別とは異なる特別な意味を持っており，子どもを亡くした親のモーニング・ワークは，通常の喪失と比較して非常に強い苦痛や困難を伴うと考えられる。

Sanders（1980）は，配偶者の死，子どもの死，親の死を比較し，悲嘆の強度が強いのは明らかに子どもを亡くした人たちであることを報告した。また，Martinson et.al（1991）は，2年前と7年前に小児がんで子どもを亡くした親66人を対象にうつの心理的兆候を測定した結果，両者に有意差が見られなかったことを報告し，時間が経過しても悲嘆は変わらずに継続していることを明らかにした。このように，子どもを亡くした親の悲嘆は非常に強く，しかも長期化するという指摘にも関わらず，長期的な視点から子どもを亡くした親のモーニング・ワークのプロセスを捉えた研究は少ない。

長期的な視点からモーニング・ワークのプロセスの理解を試みた数少ない研究の一つとして，金子（2004）の研究がある。金子は，死別から面接調査に至るまでの期間を幅広く設定し，子どもを亡くした母親がどのように悲嘆を経験してきたかについて検討した。その結果，母親のモーニング・ワークのプロセスは，「心理・社会・身体/行動・スピリチュアル」の4つの側面に及んでいることを報告した。また，そのプロセスについて，母親の悲嘆は薄れるのではなく，揺れ動きながら変化していることや，母親は時間が経過しても自責の念などを抱いているものの，子どもの死の意味を模索しながら徐々に子どもの死を受容し，子どもと共存していることを明らかにした。この研究において，母親が経験した悲嘆やその悲嘆への対応は詳細に記述されているが，子どもを亡くした母親が回復へと向かう心理過程にどのような特徴があるのかは明らかにされていない。また，悲嘆と時間との関連性のみに注目しており，モーニング・ワークと関連する他の要因に関しては考慮されていない。そこで，本研究では，子どもを亡くした母親のモーニング・ワークのプロセスを長期的な視点から捉え，さらにその関連要因についても検討することとする。

モーニング・ワークとの関連要因の一つとして，子どもの死による家族の関係性の変化をあげることができる。子どもは家族の一員であり，子どもの病気や死はこれまで構成されていた家族構造に大きな衝撃を与える（岡堂，1991）と言われる。太田（1996）は，子どもを亡くした母親のモーニング・ワークを促進するものとして，夫との気持ちの一致や身内との信頼関係を挙げている。 しかし，その一方で，子どもの死に伴って生じる悲嘆の強さ，表し方，回復までの時間は，母親と父親では異なる（小松・岩田，1989）という指摘もなされており，子どもとの死別後に夫婦間で葛藤が生じる可能性が考えられる。従って，本研究では，母親のモーニング・ワークと関連する要因の一つとして，母親と家族との関係性の変化に焦点を当てる。ただし，本研究の対象者の子どもは，先天性の疾患や障害を持っていたことから，子どもの誕生と同時に母親と家族との関係性に変化が起こる可能性が考えられるため，子どもの誕生から死別を経て面接時に至るまでの期間を母親と家族との関係性の変化のプロセスを捉えることとする。

以上のことから，本研究では，①子どもを亡くした母親のモーニング・ワークのプロセスの心理的特徴を明らかにすること，②子どもの病気・死による母親と家族との関係性の変化のプロセスを明らかにすること，の2点を目的とした。

## 方　法

**調査対象者**　子どもとの死別後 11～12 年経過した母親 4 名（Table 1）。対象者の子どもはいずれも先天性の疾患や障害を持っており，大学病院の小児科で長期の入院生活を送っていた。

**手続き**　各 1 回の半構造化面接を行った。面接は 120 分から 180 分を要し，内容は全て対象者の承諾を得て録音し，後日，逐語記録を作成した。

**調査内容**　①子どもが生きている時期（妊娠から死の直前まで），②看取り，③死別後，④現在，の 4 つの時期における，出来事，対象者の気持ち，亡くなった子どもへの思い，家族の様子や対象者と家族との関係について質問項目を設定し，対象者の自発的な語りを聞いた後，補足的な項目について尋ねた。

**データの分析**　モーニング・ワークのプロセスについては，逐語記録から，1 事例ごとに②～④の 3 つの時期における，出来事・母親の感情・子どもに対する思いを抜き出し，その心理状態をまとめた。さらに類似したものをまとめ，4 事例の中で共通すると考えられる心理状態にラベリングを行った。家族との関係の変化のプロセスについては，逐語記録から，1 事例ごとに①～④の 4 つの時期における，家族に関連した出来事・家族に対する感情を抜き出し，それ以降はモーニング・ワークのプロセスと同様の手順で分析を行った。ただし，夫との関係と他児（亡くなった子どもの兄弟）との関係は別にして分析した。

Table 1 調査対象者のプロフィール

| | 年齢 | 死別～面接の期間 | 子どもの病気・障害名 | 直接の死因 | 家族構成 |
|---|---|---|---|---|---|
| 事例A | 54歳 | 11年 | 気管狭窄症 | 出血 | 夫，長女，次女，三女(E) |
| 事例B | 46歳 | 11年 | 先天性心疾患 | 心疾患 | 夫，長女(F)，次女，三女 |
| 事例C | 54歳 | 12年 | 染色体異常 | 感染症 | 夫，長男，長女，次男，次女(G) |
| 事例D | 44歳 | 11年 | 多発奇形 | 感染症 | 夫，長女，長男(H)，次男 |

注）()は死別した子どもを指す.

## 結　果

### 1. 子どもを亡くした母親のモーニング・ワークのプロセス

逐語記録をもとに分析を行った結果，最終的に「ショック」，「否認」，「情緒的混乱・悲嘆」，「模索」，「再建」の 5 つにまとめられた。この 5 つのカテゴリーを，子どもを亡くした母親のモーニング・ワークのプロセスの各段階とした。各段階を構成する下位カテゴリーと調査対象者から直接得られた発言の例を，Table 2 に示した。これらをもとに，子どもを亡くした母親のモーニング・ワークのプロセスにおける，各段階の状態像を定義した（Table 3）。さらにこの状態像をもとに，各対象者の段階間の推移を時間経過に従って分析し，それらを総合すると，子どもを亡くした母親のモーニ

Table 2 モーニング・ワークのプロセスの各段階の下位カテゴリーと発言内容

| 段階 | 下位カテゴリーと発言内容 |
|---|---|
| ショック | **激しい衝撃(A)**:あのときの(亡くなったときの)状況ね，あの時ちょっと手術室で倒れてしまったから，あんまりはっきりわかんないんだけど．(A)<br>**無感覚(B, C, D)**:夢なんだろうか，現実なんだろうか，って．(B)／何もしないでGにず一っとついてて．何も考えられなかった状態でそのままいた．(C)／亡くなってから初めはぼ一っとしてたよね．初めは何が何だか．(D) |
| 否認 | **悲しみを感じない・充実感(B)**:亡くなったときの悲しみとか，あれもしてやればよかった，これもしてやればよかった，ってそれが無かったっていうの，逆に．(中略)ああ，何か面倒見させてもらった，育てさせてもらったっていうのが私には充実感としてあったからね．(B) |
| 情緒的混乱・悲嘆 | **絶望感(B)**:もう何もかも失ったようなショックと絶望感．(B)<br>**身近な他者への怒り・イライラ感(A, C, D)**:(夫の女性問題が発覚して)二人ともまとめて殺そうかなって思うぐらい，とってもほんとに悔しかったし．何でこんなときにって思ったから．(A)／簡単なことでイライラしてからしょっちゅう(夫と)ケンカしてた．(C)<br>**やり場のない怒り(B)**:何でうちだけ子どもがこんなに死んでしまうの，とか．どうしてうちだけ必ず別れ別れにならないといけないのって言って．(B)<br>**思慕(A, C, D)**:Gが亡くなった後は，車出して家出何度もやったもんね．で，Gが入院していた病院の駐車場に行って，眠って帰ってくるとかさ．(C)／思い出すのはねぇ，Hのことだけだったしね．病院に行けばいるんじゃないか，いるんじゃないかって思って．(D)<br>**無気力(B, C)**:何もしたくないわ一って感じ．何をしても何を見ても喜びも感動も悲しみもないのね．(B)／Gもあっち行ってることだし．別に死んだっていいよっていう気持ちで．G亡くしてからずっと思ってたね．(C) |
| 模索 | **外界とのつながりを持ち始める(A, C, D)**:お父さんが，会社に来たら少しは元気出るんじゃないかなって言うから．それで会社に顔出すようになって．その頃から少しずつ．(C)／中にいてもだめだねっていうことで，外に少しずつ出てみようかなって新聞配達したり．(D)<br>**子どもの死の意味の模索(B)**:なぜこんな苦しい状況になって，なぜこんな体験をして，痛みを味わわなければならないのか．別に宿命でも運命でも何かの罰でも何でもなく，何か理由があるはず．(B) |
| 再建 | **子どもの存在を通して得た価値への気づき(A, B, C, D)**:Eが病気になって入院したことによって，下の子も，今まで自分ひとりって思ってたのが，ある意味家族の結束，たぶんできたはず．(A)／H辛い目合わしたけど，いろんな勉強もさせられたし．(中略)いろんな人たちとの巡り会いがあってやってきたから．宝物いただいたな一って未だに感じる．(D)<br>**生前の母子のつながりを確認(A, B, C)**:1歳半だけど，お母さんってのはわかってたから．これだけはちょっとほっとするし．(A)／笑わないって初め言われてた子が，HHH一って言ったら，ふって笑ってから．苦しい顔の中で笑って．やっぱし愛情かけてあげたら親のこともわかってから．(D)<br>**子どもの人生のポジティブな面に目を向ける(A, B)**:そのときに苦しまないで死んだんだなっていうのがやっぱりちょっとあったから．それはやっぱちょっとほっとしてるのと．(A)／Fも幸せだったかもしれんけど，私もとっても嬉しかった．とても幸せだった．(B)<br>**子どもの人生への意味づけ(B, C)**:何で私の子こんな目に合ったの？って思うけど，でもあの子はそういう人生を歩むっていうシナリオを神様からもらっていて，あの子はあの子にしか表せない，そういう輝きってものを，この私の中にも残していってくれたんだな一って．(B)／この子は･･･私や皆の家族にとって必要とされて生まれてきてるから．生きてきた2年間は，私にとっても皆にとっても人生の中に大きなプラスを残しているって私は信じてるわけ．(C)<br>**子どもの死への意味づけ(A, B)**:Eはやっぱり家族を守るために，自分がそのまんまずっとこの生活を続けたら家族はばらばらのまんま．だから自分は･･･Eは亡くなって．(A)／やっぱり子を失うって悲しみでさえも，(中略)それを負わされた私は，それはとても潰されそうになる重荷ではなくて，神様がそれを責任とってくださるって．(B)<br>**子どもが傍にいる(A, D)**:自分の心の中に，心の中にっていうか身体の中に，Eそのまま入ってるような感じ．(中略)亡くなってすぐぐらいからそういう気持ちはあるはず，たぶん．(A)／何ていうか，離れられない．自分の中でこう，いるんだ一って世界ができてる．(中略)親としてはやっぱしこの子と共に生きてく．(D)<br>**希望の再発見(A, B, C, D)**:どれくらいこの世に生かしてもらえるかわからないけど，とっても面白いことがたくさん見れるなっていう．(B)／きついことではあるけど，やっぱし，今からまたスタートだっていう時期でもあった．次男生まれたから頑張らないといけないって．(D)<br>**自責の念の持続(A, B, C, D)**:でもすまなかったっていう思いが私の中にはあるのね．こんなに頑張らしてごめんねっていうの．(B)／もっともっと抱っこしてあげたかったけど，体力が私あれでいっぱいいっぱいだった．だからG，お母さん疲れたんじゃない？と思って早く逝ったのかなと思って．これだけがちょっと悔しい．(C) |

ング・ワークのプロセスとして，Figure 1 のような流れが見出された。また，各対象者のモーニング・

ワークのプロセスを分析した結果，1事例（事例B）のみが全段階を通過し，3事例（事例A,C,D）が「否認」以外の段階を通過していた。ただし，事例Dは，死別後に出産した子どもが病気を持っていたことを契機に，悲嘆が再燃していた。

Table 3 モーニング・ワークのプロセスの各段階の状態像

| 段階 | 状態像 |
|---|---|
| ショック | 子どもの死という痛ましい事実に対する心理的なショック状態．死別直後に経験する感覚で，身体化するほどの激しい衝撃，または，心理的には逆に平穏で感情が鈍麻した状態． |
| 否認 | 子どもの死に対する悲しみを感じておらず，逆にやり遂げた育児への充実感で満たされている状態． |
| 情緒的混乱・悲嘆 | 辛い現実を直視することによる絶望感，やり場のない怒り，亡くなった子どもに対する思慕の情，無気力などが見られ，心理的に非常に混乱した状態．この時期，母親は亡くなった子どもとの世界に閉じこもる． |
| 模索 | 悲嘆から抜け出そうと試みるが，心的エネルギーは低い状態．仕事を始めるなどの外的な世界とのつながりを持ち始める，または子どもの死の意味を模索しようとする． |
| 再建 | 現実世界において希望を再発見し，心理的に安定した状態．ただし，子どもとの世界を保ち続けている．子どもの一生や死に対する納得のいく意味づけを行って安堵感を得る一方で，子どもに対する自責の念は持続している． |

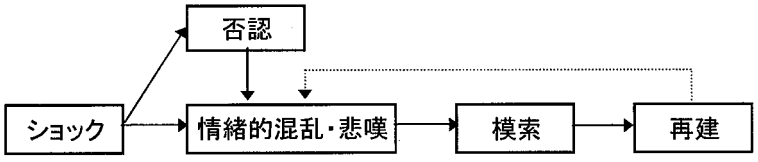


Figure 1 モーニング・ワークのプロセス

## 2. 母親と家族との関係性の変化のプロセス

### (1) 母親と夫との関係の変化のプロセス

逐語記録をもとに，時間の経過に着目して分析を行った結果，最終的に「夫婦間の葛藤」，「夫婦の協力」，「夫への不信感」，「夫への理解」，「夫の悲嘆の実感」，「夫への信頼感」，「夫婦関係の模索」の7つにまとめられた。この7つのカテゴリーを子どもの病気・死による夫婦関係の変化のプロセスの各段階とした。各段階を構成する下位カテゴリーと調査対象者から直接得られた発言を引用し，Table 4に示した。これらをもとに，夫との関係の変化のプロセスにおける各段階の状態像を定義した（Table 5）。各対象者の夫婦関係の変化のプロセスを検討した結果，全事例において先天性の疾患・障害を持った子どもの誕生による「夫婦間の葛藤」を経験していたが，子どもの入院時に「夫婦の協力」を経た事例（事例B,D）は子どもとの死別後に「夫の悲嘆の実感」を得ており，最終的には「夫への信頼感」を持っていた。それに対し，「夫婦の協力」を経なかった事例（事例A,C）においては，子どもとの死別後「夫への不信感」が高まっていた。しかし，事例Aにおいては，後に夫の

苦しみに気づき，「夫への理解」が進むことによって，「夫の悲嘆の実感」に至っていた。また，事例Cにおいては，時間が経過するとともに夫を理解しようと試み始め，調査時は「夫婦関係の模索」を行っている状態であった。

**(2)母親と他児(死別した子どもの兄弟)との関係の変化のプロセス**

逐語記録をもとに分析を行った結果，最終的に「分離による葛藤」，「精神的支え」の2つにまとめられた。この2つのカテゴリーを，子どもの病気・死による母親と他児との関係の変化のプロセスにおける，各段階の状態像とした。また，調査対象者から直接語られた発言を引用し，Table 6に示した。これらをもとに，他児との関係のプロセスにおける，各段階の状態像を定義した(Table 7)。各対象者の他児との関係の変化のプロセスについて検討した結果，幼い他児を持つ3事例（事例B,C,D）が，亡き子の入院中に「分離による葛藤」を抱えており，また，3事例（事例A,C,D）が，子どもとの死別後には他児を「精神的支え」として捉えていた。

Table 4　夫との関係の変化のプロセスにおける各段階の下位カテゴリーと発言内容

| | 夫婦関係の変化のプロセス | 下位カテゴリーと発言内容 |
|---|---|---|
| 入院生活 | 夫婦間の葛藤 | **夫の協力が得られない(A, B, C)**：主人はほとんど付き添いを代わってくれなかった.（A)／お父さんはもう，全然お父さんになりきれない.（中略)進んで，疲れてるんじゃないかとか，ちょっと交代しようかとか，少し寝れば？自分が見てるから，とか．進んでそういうこと言ってもらったこと一回も無かったね.（B)／お父さんとのコミュニケーションが無かった．お父さんもたまに交代してほしいって言っても嫌がる.（中略)このことをもっと夫婦で話したかったな.（C) |
| | 夫婦の協力 | **夫による協力(B, D)**：あの時からお父さんが時々交代してね．どっか連れてったら？とか，帰って次女と一緒に寝てもいい？って言ったら，いいよって言うようになったのはそっからだったね.（B)／こんな状態では娘もかわいそうだね，ってなって．で，1週間に(1回)．主人が付き添ってくれることになったのよ.（D) |
| 子どもとの死別後 | 夫への不信 | **夫に対する不信感(A, C)**：自分では子どもを亡くして一生懸命やってるのに，それをわかってほしい主人がその(冷たい)言葉をどんどんどんどん私に浴びせてくるから，よけいもう，いられない.（A)／何か冷たかった，私に対してずっと．子どもを亡くした母親に対する旦那の態度かなっていうのがず一っとあって.（C) |
| | 夫への理解 | **夫の苦しみへの気づき・モーニング・ワークの差異の理解(A)**：(お墓へ向かうときに)もう絶対，こんなこと言われて私はもう絶対別れてやるって思いながら，車乗って一緒に行くわけね．したら主人がさ，「ごめんね」って言うわけ．「自分はそんなこと言うつもりはないんだけど，自分の口から言葉が出てる」と.（中略)それからやっぱり主人のことが少しずつわかるようになってきたかな.（A) |
| | 夫の悲嘆の実感 | **夫の悲嘆を実感(A, B, D)**：たぶん考えたら主人もあの時普通じゃなかったはず.（中略)それからやっぱり主人のことが少しずつわかるようになってきたのかな.（A) ずっと立ち直れなかったのはお父さんのほうが強かったね．うん，とても荒れてたしね．優しさのかけらも無くなっていたからね.（B)／落ち込んでいたんじゃないかな．ずっとしばらく.（D) |
| | 夫への信頼感 | **夫婦の絆の再確認(D)**：支えてくれたね．夫がいなかったらやって来れなかったんじゃないかな.（D) |
| | | **夫を見守る(B)**：まだまだって思うんだ．主人もこの子(次女)も．だから，どんな体験をきっかけにそれをクリアするのかは私にはわからないけど．それをほんとに心待ちにしながらね．見守っていこうかなって.（B) |
| | 夫婦関係の模索 | **夫婦関係の回復への試み(C)**：私がお父さんに対する気持ちをもっと整理して，抑えて，理解してやることに，私の課題がこれなんじゃないかなと思っているんだけど.（C) |

Table 5 夫との関係の変化のプロセスの各段階の状態像

| 段階 | 状態像 |
|---|---|
| 夫婦間の葛藤 | 先天性の疾患・障害を持った子どもの誕生によって，母子ともに入院生活を送るが，夫からの協力を得られずに，夫に対して不満を抱いている状態. |
| 夫婦の協力 | 家に残された他児が情緒不安定になったことを契機に，夫が母親に協力するようになり，それによって入院生活に適応できるようになった状態. |
| 夫への不信 | 子どもとの死別後，夫の冷たい態度や言動を理解できず，夫に対する不信感が高まっている状態. |
| 夫への理解 | 子どもの死に対する夫の苦しみに気づき，夫のことを理解し始める. |
| 夫の悲嘆の実感 | 子どもの死に対して，夫が落ち込み，辛い状況であることを実感している状態. |
| 夫への信頼感 | 夫婦の絆を再確認する，辛い状況にある夫を見守るなど，夫婦間の信頼関係が構築されている状態. |
| 夫婦関係の模索 | 子どもの死に対する夫の悲嘆を実感できないものの，夫との関係を見直し，夫を理解しようと試みる. |

Table 6 母親と他児との関係の変化のプロセスにおける発言内容

| | 他児との関係の変化のプロセス | 下位カテゴリーと発言内容 |
|---|---|---|
| 入院生活 | 分離による葛藤 | **母親と他児との分離（B，C，D）**：真ん中の子も精神的にちょっと危うい感じになってて.（中略）お家にこの子（次女）置いてね，私もとっても生木を裂かれる思いだったけど.（B）／1歳から2歳にかけてお母さんがいない. こっち（次男）はまた大変，Gはまた大変っていうので，もう，何. 身が二つ欲しい. もう心がいつも落ち着かない. これが苦しかったね.（C）／（病院に面会に来た長女に）階段でさ，ずっと泣かれてからさ. 私なんかさ，飛んでから，もう死のうかなと思ったときあったわけ. それぐらい追い詰められてた.（D） |
| 子どもとの死別後 | 精神的支え | **母親が他児を精神的支えとする（A，C，D）**：娘と，あと友達がいることによってやっぱ救われたのかな. そうじゃなければ今頃もしかしたらいなかったかも. この世に.（A）／別に死んだっていいよっていう気持ちで.（中略）ただ，そういう部分が多くを占めていたけど，本気で死ぬというつもりまではないよ. 子ども3人もいるんだから.（C）／長女がいなかったら，ほんとにもう自分駄目になってたんじゃないかなって思うんですよ. 上の子がいたから何とか頑張れた.（D） |

Table 7 母親と他児との関係の変化のプロセスの各段階の状態像

| 段階 | 状態像 |
|---|---|
| **分離による葛藤** | 母子ともに入院生活を送ることによって，家に残された他児を世話できないことに対する葛藤を抱いている状態. |
| **精神的支え** | 子どもとの死別後，他児の存在が母親の精神的な支えとなっている状態. |

(1)(2)に関して，各対象者の段階間の推移を時間経過従って分析し，これらを総合すると，Figure 2 のような流れが見られた。

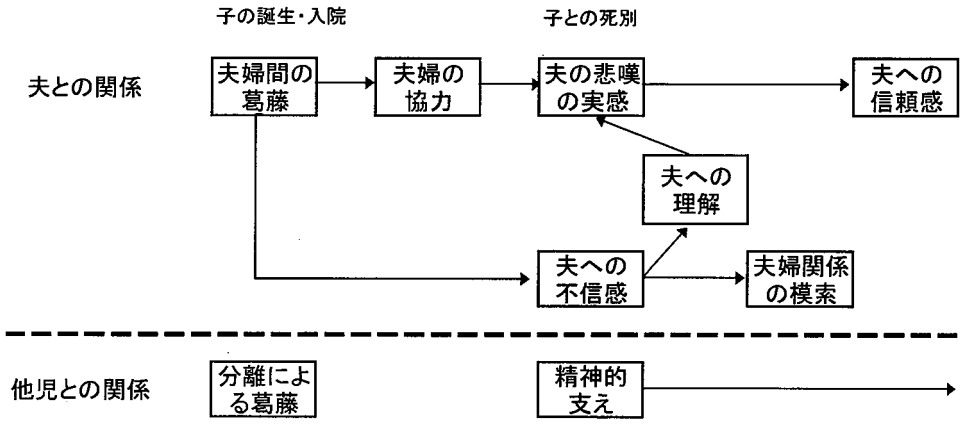


Figure 2 母親と家族との関係の変化のプロセス

## 考　察

### 1. 子どもを亡くした母親のモーニング・ワークのプロセス

子どもを亡くした母親のモーニング・ワークのプロセスとして，「ショック」，「否認」，「情緒的混乱・悲嘆」，「模索」，「再建」の５つの段階が見出された。「ショック」，「否認」，「情緒的混乱・悲嘆」の３つの段階については，他の対象喪失に伴うモーニング・ワークと共通していると考えられるため，ここでは，子どもを亡くした母親が回復へと向かう過程の心理的特徴であると考えられる「模索」と「再建」に焦点を当てて考察を行う。「模索」の段階は，山本（1997）の言う「再建へと向かう進展的過程」が始動した時期であると考えられる。この段階では，悲嘆の境地にあった母親が，外的世界とのつながりを持ち始め，現実世界へと徐々に適応していく姿，あるいは，内的世界において子どもの死の意味を懸命に模索する姿が見出された。この段階を経て初めて，母親は心理的に安定した「再建」の段階に至っていた。「再建」の段階では，母親は現実世界で希望を再発見し，人生を楽しもうという意欲が高まっており，心理的には安定した状態であると捉えられた。また，母親は自己の内的世界において，子どもの一生や死に対して自分なりの意味づけを行っており，そうすることで安堵感を得ていた。しかし，それでも生前子どもが苦しい思いをしたことや，十分にやれることをやってあげられなかったという自責の念は，時間が経過しても強く存在していた。このことから，子どもを亡くした母親は，現実世界で希望を再発見し，心理的な安定を得てもなお，子どもの一生への納得と自責の念の狭間で葛藤を抱えた状態にあると言えるだろう。

また，事例 A，D において，喪失対象の「内在化」と捉えられる発言が聞かれた。山本（1997）によると，喪失者の「内在化」は希望の再発見に至る過程に関連するものであり，喪失対象の内的復活によって真の離脱と断念が完了する。しかし，本研究において，事例 A では，死別直後から子どもと「ひとつになってる」感覚を持っていたし，事例 D では，面接時悲嘆が再燃していたにも関わらず，子どもが存在する世界を持っていた。このことから，喪失対象の「内在化」は必ずしも再建過程が始動したことの指標になるわけではないという可能性が考えられる。後に山本（2004）は，児童殺傷事件の被害者遺族である母親の手記を分析し，その母親にとってモーニング・ワークは「死

者を殺す」のではなく，「死者を（死にも拘わらず）生かし続け，共に生き続ける」営みであると述べている。以上のことから，子どもを亡くした母親の中には，そのモーニング・ワークにおいて，喪失対象を「復活させる」というよりも，喪失直後から自己の中に「内在化」させる，すなわち心の中で生かし続ける事例も存在すると考えられ，このことは子どもを亡くした母親のモーニング・ワークの心理的特徴の一つと言えるかもしれない。

**2. 母親の家族との関係の変化のプロセス**

夫婦関係の変化のプロセスとして，「夫婦間の葛藤」，「夫婦の協力」，「夫への不信感」，「夫への理解」，「夫の悲嘆の実感」，「夫への信頼感」，「夫婦関係の模索」の7つの段階が見出された。事例別に検討した結果，全事例が，先天性の疾患・障害を持つ子どもの誕生によって「夫婦間の葛藤」を経験していたが，後に「夫婦の協力」を経た事例は，子どもとの死別後，「夫の悲嘆の実感」を得ており，最終的には「夫への信頼感」を持っていた。それに対し，子どもが生きている時期に「夫婦の協力」を経なかった事例は，子どもとの死別後，「夫への不信感」が高まっていた。この結果から，死別前の夫婦の関係性が，死別後の夫婦の関係性を規定する可能性が示唆された。子どもとの死別後「夫への不信感」が高まっていた2事例は，子どもが生きている時期に夫の協力を得られない状態にあった。そのため，子どもとの死別以前から，夫が子どもを受け入れていないのではないかという思いや，一人で世話をしているという孤独感を強く持っていたことが予想され，子どもとの死別後に以前からの葛藤がより大きくなった可能性が考えられる。また，柳原・近藤（1999）によると，子どもを亡くした母親は，夫と共に悲しめないことによって，夫は亡き子を本当は愛していないのでは，という不信感を持つことがあるという。上記の2事例においても，母親が夫の悲嘆を実感できないことが示され，このことが夫に対する不信感へとつながっていたと考えられる。

母親と他児との関係の変化のプロセスとしては，「分離による葛藤」，「精神的支え」の2つの局面が見出された。母親は亡き子の入院中，家に残された他児への世話をできないという強い葛藤を抱き，子どもとの死別後は，他児の存在が母親の精神的支えとなっていた。これらのことから，母親にとって，亡くなった子どもと同様に他児は重要な存在であることが確認された。子どもの喪失に伴って，母親は母親役割を失う（Rando，1986）と言われるが，本研究の対象者は，他児の存在によって死別後も母親役割を維持することができ，悲嘆の渦中にいる間，他児を世話することによって精神的に支えられていたと考えられる。

**3. 本研究の限界と今後の課題**

まず，本研究の限界として，調査対象者が4名と非常に少数であると同時に，先天性の疾患・障害を持ち，大学病院で亡くなった子どもの母親であるという特殊性を考慮する必要がある。今後は，死因を一つの疾患に限定することや，より多くの対象者を分析することで，子どもを亡くした母親のモーニング・ワークに，より共通性のある特徴が見出せるのではないかと考えられる。また，本研究では，子どもの死による家族の関係の変化を母親の視点からしか捉えることができなかった。母親に加えて，父親や他児（亡くなった子どもの兄弟）の視点から家族の関係の変化を捉えることで，子どもを亡くした家族のより詳細で緻密な家族力動を明らかにできるものと考えられる。

## 引用文献


Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss Ⅲ: Loss, Sadness and depression.* The Hogarth Press.
(Bowlby, J. 黒田実郎・岡田洋子・横浜恵三子（訳）(1981). 母子関係の理論Ⅲ：対象喪失　岩崎学術出版社)

Freud, S. (1917). Trauer und Melancholie. *Internationale Zeidschrift für arzriche Psychoanalyse*, **4**, 288-301.
(Freud, S. 井村恒郎・小此木啓吾（訳）(1970). 悲哀とメランコリー　フロイト著作集6　人文書院)

金子絵里乃 (2004). 小児がんで子どもを亡くした母親の悲嘆のプロセスとその対応　社会福祉学, **44**(3), 32-41.

小松美穂子・岩田知子 (1989). 新生児を亡くした両親の悲しみの分析　筑波大学医療技術短期大学部研究報告, **10**, 23-34.

Kübler-Ross,E. (1969). *On death and dying.* NewYork:The Macmillan Company.
(Kübler-Ross,E. 鈴木　晶（訳）(1998). 死ぬ瞬間—死とその過程について　読売新聞社)

Martinson, I., Davies, B. & McClowry, S. (1991). Parental depression following the death of a child. *Death Studies*, **15**, 259-267.

岡堂哲雄 (1991). 家族心理学講義　金子書房

小此木啓吾 (1979). 対象喪失—悲しむということ　中央公論社

太田尚子 (1996). 周産期に子どもを亡くした母親のグリーフ・ワークに関する研究—グリーフ・ワークに影響を及ぼす要因—　茨城県立医療大学紀要, **1**, 39-46.

Rando, T.A. (1986). *Parental loss of a child.* Illinois: Research Press Company.

瀬藤乃理子・丸山総一郎 (2004). 子どもとの死別と遺された家族のグリーフケア　心身医学, **44**(6), 395-405.

Sanders, C.M. (1980). A comparison of adult bereavement in the death of a spouse, child, and parent. *Omega*, **10**, 303-322.

山本力 (1997). 喪失の様態と悲哀の仕事　心理臨床学研究, **14**(4), 403-414.

山本力・濱崎碧・玉井千里 (2004). ある被害者遺族の有効なモーニングワークに関する質的分析—ラガーシュ仮説の再検討を含めて—　岡山大学教育実践総合センター紀要, **4**, 137-145.

柳原清子・近藤博子 (1999). 小児癌で子供を亡くした母親の社会化の研究　日本赤十字武蔵野短期大学紀要, **12**, 45-53.